

震災特集

学年通信

伝えたい。あの日の事を...

阪神・淡路大震災から二十六年

震災を知らないあなたに知って欲しいあの瞬間



～生きる～ 鎮魂・16年目の阪神・淡路大震災を迎えて... kuritchiさんの旅行ブログ(2011年)より転載

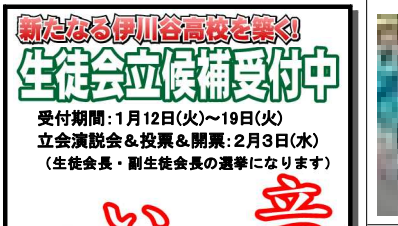
平成7年(昭和)1月17日、あの日は成人の日を挟んだ三連休明けの火曜日だった。午前5時46分、淡路市北部を中心とするマグニチュード7.3の直下型地震が発生した。後に阪神・淡路大震災と呼ばれる地震である。神戸市須磨区から西宮、淡路に至る広い範囲で震度7を観測し、64人の死者、37人の負傷者(18年に確定を出し、避難者は一時32万人近くまで及んだ。日本の大都市を襲った震災としては関東大震災(昭和)以来で、未曾有の大震災と呼ばれた。

学年通信 VOL.3

4月・8月と2回にわたり続いた『学年通信ハガキ版』ですが、第3弾は何と年明け早々にやってきました。「うおっ、年賀状や!」



告スタイルにまためでました。ただ、ハガキだけは年賀ハガキを使いまして、普通ハガキでした。もし届いていない人が居たら、至急教えてね。おねがい♡



これが届きました

『私たち自身でできる事、今一度しかりやってみよう!』

緊急事態宣言再び!

まだまだ終わりが見えない新型コロナウイルスの影響。2年生44回生がずーっと楽しみにしていた修学旅行も無念の中止となりました。関東だけでなく関西も再び緊急事態宣言が出ました。本当に起るまで一寸先は闇です。こんな状態がいつまで続くのか、それは誰にも分かりません。最近では皆のアルコール消毒をする姿をあまり見なくなりまし。その反面、マスクをずらして会話する姿がよく見えます。耳にタコができる位によく聞く事ですが、

3学期始業式行われる

三学期は1月8日(金)開始でした。オンライン始業式の予定が直前にネットがダウンし、急ぎよ放送実施に切り替わりました。これを「臨機応変」と言います。校長先生から「継続できる才能」「良い事の習慣化」等のお話があり、講話終了後の生徒指導部長「武蔵」等のお話がありました。話を聞いて感動が伝わりました。

1年あれこれ

▼危険なトイレ 大掃除のときはトイレもこのまま以上に細かいところまでキレイにします。ビニール手袋をして、小便器の着脱トラップ(排水溝のフタ)を磨こうとする、「うわっ、水が出てきた!」自動洗浄センサーも、こういうときは危険極まりないです!。

天性人語45th

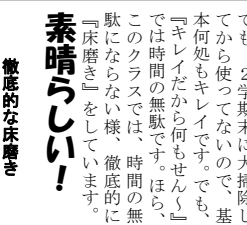
震災を語り継ぐ、実はこれ程難しい事は無いので、阪神・淡路大震災以降も東北、熊本他各所で震災は起こっている。しかし、人は忘れる生き物である。時の経過と共に、これらの記憶も確実に風化していく。▼阪神・淡路大震災から四半世紀、神戸も震災を体験していない。教育の現場でも、『震災が来たらどの様に行動すれば良いのか』といった教育がきちんと成される様になった。しかし、その中に『震災を体験した人達の無力感や悲痛な叫び』といった心の部分が抜け落ちてはいないだろうか。▼3年前、阪神・淡路大震災のモニュメント、犠牲者の名が刻まれた「プレート」に『あはばか』という落書きが発見された。こんな犠牲者を冒とくする様な行為は真にあり得ない話である。だがこれは、あの震災の体験を十分に伝えきれない私達にも責任の一端があるのかも知れない。▼26年前、多くの1分間の出来事で多くの人の命が奪われ、本当にたくさんの人の人生が大きく変わった。これは紛れもない事実である。あの揺れ、あの光、あの炎、そしてあの時の場所に住った人々の想い、今こそそれをもっと積極的に伝えていくべきではないだろうか。忘れてはいけない多くの事が風化してしまいう前に。(福田)

収束見えぬコロナ

まだまだ終わりが見えない新型コロナウイルスの影響。2年生44回生がずーっと楽しみにしていた修学旅行も無念の中止となりました。関東だけでなく関西も再び緊急事態宣言が出ました。本当に起るまで一寸先は闇です。こんな状態がいつまで続くのか、それは誰にも分かりません。最近では皆のアルコール消毒をする姿をあまり見なくなりまし。その反面、マスクをずらして会話する姿がよく見えます。耳にタコができる位によく聞く事ですが、

素晴らしい!

徹底的な床磨き



笑顔

これだけ笑顔が戻ってきました

試しに足で押すと

シャカ シャカ

シャカ シャカ

笑顔

これだけ笑顔が戻ってきました

笑顔

これだけ笑顔が戻ってきました

紙面から

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

45回生版

兵庫県立伊川谷高等学校 45回生

阪神・淡路大震災26年

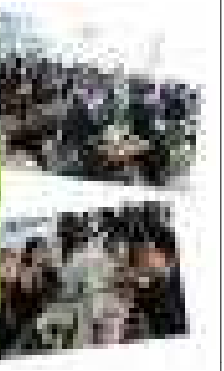
三学期始業式行われる
収束見えぬコロナ
生徒会立候補受付中
あの震災は何だったのか

兵庫県立伊川谷高等学校

校歌(3番)
作詞 黒部 孝
作曲 岡村 健治

笑顔・夢

学年キャッチフレーズ
校訓
自主 協同



読者のページ

School Teacher @ Voice

特集

私達にとって あの震災後は 何だったのか...



わずかに看板だけが残る鷹取商店街



猛煙に包まれる神戸市の鷹取地区

あの震災の体験は忘れようとしても決して忘れることができない。しかし、26年という月日は確実に記憶を鮮明なものにしていく。今、ここに活字として残すことで、少しでもあの時の記憶を正確に残すことができればと考え、ここに記しました。
令和3年1月10日
福田浩三

① 震災、その瞬間...

1月17日は3連休明けの火曜日であった。早朝まだ周りが暗い中、突然その揺れが始まった。いや、揺れとは言えない。下から突き上げる波に私は身体をのめられているかの如く、その揺れは私の身体をはね飛ばし、転がっていた。
『地震だ!』という認識などできない程に経験したこのない揺れであった。二階に寝ていた私は這って階段までたどり着いたが、ここにあるはずの手すりは既になく、四つん這いのまま半ば駆け落ちるような階段を下りていった。
台所にたどり着くと、テーブルの下に両親が居る。入るように促された。『これじゃ、家がもたない!』と思い、揺れが少し落ち着いたらときに勝手口から外へ出た。塀は倒壊し、暗い夜空を明らかに稲妻とは異なる不気味な光が走っていた。

多くのビルが1階部分を押し潰されて倒壊した



多くのビルが1階部分を押し潰されて倒壊した

② 朝を迎えて

テレビも映らず、何が起ったのか全く分からなかった。電気は止まり、家の外ではガスの臭いが立ちこめていた。蛇口をひねっても水は出ない。携帯電話も普及していない時代。誰にも連絡が取れない。日が昇り、瓦の落ちた家や穴が空いた壁、崩れた崖などを目の当たりにし、徐々に状況が掴みだした。電池で動く携帯テレビスが壊れたのを思い出して、それを探した。そしてようやく震源が淡路の地震であり、高速道路が倒壊し、その状況は全く報道されなかった。いや、報道局も掴めていなかったのだ。
幸い、我が家の電気は当日中に復旧し、水道も4日後に復旧した。だが、水道が使えない間はトイレも流せない。極力水分をとる事を控えた。トイレは風呂の残り水を大切に活用していたので、水道の復旧は本当に有難かった。しかしガスだけは、その復旧までに3週間を要した。

大阪の親戚を頼り、時には震災翌日より新聞は配達された。非常時発行のページ数は少なかつたが、震災の状況を知る大切な情報源になった。新聞には震災死亡者の欄があった。初めは2段程度であったが、次第に拡大し、1週間程で一面全部が死亡欄で埋め尽くされた。細かい字で死亡者の姓名・性別・年齢・住所が書かれていたが、私はその中に1人の女性の名を見つけた。私と私塾の講師を努めて2年目の時の生徒であった。頑張り屋で、難しと言われれば高次に合格し、その後頻りに塾に顔を出してくれていた。当時まだ20歳であったその女性の家は死亡者がほとんど居ない須磨区だったのだが、古い住宅密集地に住んでいた事を知っていたため震災直後から嫌な予感が確認し、そこに名前が無いう事で安心をしていたのだが、ついにその名前が前回の横には、女性の両親と姉の名前もあった。

③ 心の引っかかり

当時、私は神戸と明石、大阪の3カ所に仕事を持っていた。しかし神戸と明石の仕事は震災のためしばらく自宅待機となり、収入源確保のため、交通網の寸断された大阪まで通う必要があった。片道5時間、電車で徒歩、代替バスを乗り継

横倒しになり道を塞ぐビル

ており、その後には火事で焼かれたのであろう事がせめてもの救いである、そう叔父は話をしてくれた。実際の事は誰にも分からない。しかし、私も同じ思いであった。その日の夜、ようやく女性の兄と直接電話で話をすることができた。
『新聞で妹さんの名前を見つけて...』
『そう、切り出した私に、...』
『そうなんですよ...』
『電話越しに少しおどけたように兄は返事をした。私はそこに、家族4人を一度に失った彼の戸惑いを感じずには居られなかった。その後は何を話したか、私も今も思い出せない。』

週末の土曜日、私は塾でその女性を一緒に教えていた元同僚を誘い、花屋の花を買って、震災で亡くなった人を弔う花である事を告げると、店員さんはとても丁寧に花束を作ってくれた。私はその花屋で練香も一束購入した。
須磨駅まではJRで行った。当時須磨駅は私鉄を含め全線不通であり、板宿の現場には須磨駅から徒歩で向かうしか無かった。須磨駅周辺は、瓦の飛んだ家が至る所にあったが、傾いたり倒壊した建物はある程度見られなかった。しかし崩れた建物や消失した区画を目にするようになった。大体この辺りだろうという所に来たが、はつきりとした場所が分からない。目流れた水は側溝を小川に流れていた。そこで洗濯を

④ 確認

焼跡で練香をあげる父親



焼跡で練香をあげる父親

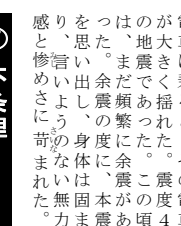
⑤ 弔い

『女性一人暮らしの家で下...』
救出を訴える張り紙

『皆無事、〇〇にいる』
『〇〇宅に一時避難』
これらの看板が立って無家が一軒だけあった。この区画の中心に位置していた家である。ところが、その女性の家であった。玄関と云っても、全ては燃えてしまっている。土台しか残っていない家の、玄関であった。ある場所から中に入った。リビングであった。黒いと思わしき焼け跡に、黒い炭になった年賀状の束があった。触れるのが、字を詠む事ができた。『おめでと』の字がはつきり読めた。勉強部屋と書かれたところには焼けた缶ベシケルが転がっていた。それは焦げて黒くなり、熱で激しく湾曲していた。まさに震災直後の火災の激しさを物語った。家を去るとき、持って来た練香の束を家の中心付近に置いた。家は最後まで、その練香に火をつける事ができなかった。あの火災現場に、再度火を入れる事が、どうしてできなかったからか。

⑥ 帰路

無事を伝える張り紙も...



無事を伝える張り紙も...